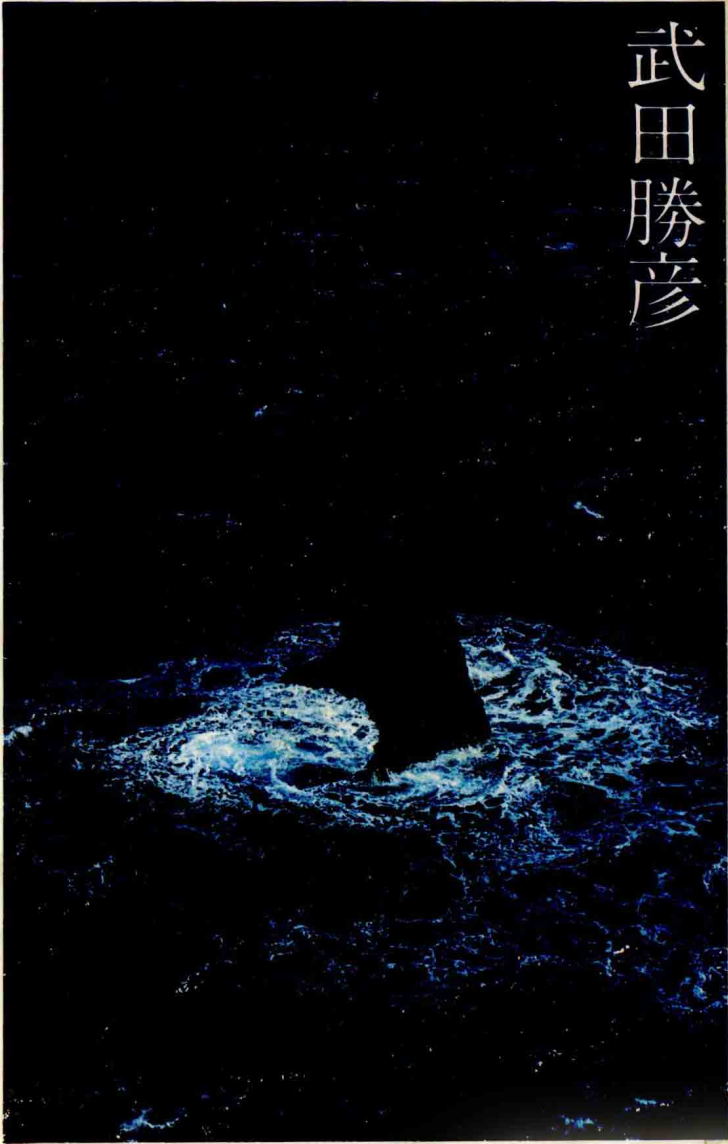


武田勝彦

比較文学の試み



創林社

武田勝彦

比較文学の試み

創林社

武田勝彦（たけだ・かつひこ）

1929年、東京小石川生まれ。上智大学経済学部卒。慶応義塾大学講師、トロント大学、ハワイ大学、インディアナ大学客員教授を経て、現在、早稲田大学政経学部・国際部教授。ヴァンダービルト大学客員教授。比較文学専攻。編著書に『川端文学と聖書』（教育出版センター）『荷風の青春』（三笠書房）『三島由紀夫事典』（明治書院）『立原正秋伝』（創林社）『日本文学問はずがたり』（東京書籍）『川端文学海外の評価』（早稲田大学出版部）『井上靖文学海外の評価』（創林社）ほか

比較文学の試み

一九八三年六月一〇日第一版第一刷発行

定価一九〇〇円

著者 武田勝彦

発行者 宮西忠正

発行所 (株)創林社

東京都千代田区三崎町二の一の二
〔仮事務所 一九八四年四月まで〕
東京都文京区小石川一―三―一六
電話東京八一三―五七六〇 ㊦ 112

須藤印刷 大口製本

© KATZ TAKEDA

0095-0158-4281

目

次

理論比較文学の提唱.....	7
サリンジャー作品と日本の古典.....	43
サリンジャーと禅.....	60
川端康成の『東京の人』における比較文学論考.....	75
日本におけるウォルター・ペイターの紹介.....	98

ペイターの「浪漫主義」と、その先行文学としてのフランス浪漫派の文学…… 172

一九二〇年代のT・S・エリオットの受容…… 197

本文・注…… 217

あとがき…… 234

索引

比較文学の試み

理論比較文学の提唱

《比較文学の歴史》 日本文学あるいはイギリス文学などと異なり、比較文学は明解な定義を下すことが難しい学問である。ごく常識的に解説すると、二国以上の文学の影響関係を研究したり、両者の特定の問題に関して対比研究を行う学問ということになる。しかし、これはかなり便宜的な定義である。比較文学がヨーロッパ先進諸国でナショナルイズム思想が華やかな頃に誕生したためにこのような定義が与えられ、それが現在にまで継承されていると考えられないこともない。

国家がある特定の言語を使用する一民族によって形成されると決まっていれば、ドイツ文学、フランス文学、スペイン文学、中国文学などと、国名を冠した文学が容易に成立することになる。これらの各国文学間の影響関係を研究することや、各国文学に現われたテーマなりアーキタイプを対比させることが比較文学であると定義することも容易である。しかし、二十世紀に入り、アメリカ

合衆国はイギリスと共通の言語を用いながらも、アメリカ独自の文学を成熟させ、それが世界文学の中でも主要な潮流となったのである。これらの兩國は國際法上はそれぞれ独立国であり、イギリス文学もアメリカ文学もその固有の文学であることが容認されているが、兩者を比較文学の分野で研究する動きは今のところ見られない。

ところが、アフリカ大陸、ラテン・アメリカの發展途上にある諸国でヨーロッパのある言語で書かれた文学作品に関しては、比較文学のジャンルで研究することが許されている。例えば、國際比較文学會議の折などにも、これらの諸国の作品と同じ言語を用いて書かれたヨーロッパ諸国の文学作品との比較研究の発表が行われている。したがって、比較文学が誕生し、それが学問として發展する過程で下された二国以上の國際文学史上の影響關係という定義は、現在では必ずしも通用しなくなっているわけである。

また、アメリカの黒人作家の中には、黒人文学のジャンルを確立させ、たとえ英語で書かれていても、白人の書いたアメリカ文学とは異質の文学であると主張する者もいる。国家と言語が同一であっても、創作の主体である作家が異種の民族に属するものであれば、ナショナルリズム時代と同じような扱いでは不適當であるとの意識がその根底に流れているわけである。しかし、現段階ではアメリカの白人作家の作品と黒人作家の作品を比較文学のジャンルで研究する立場は取られていない。

比較文学の名付け親は一八一六年にこの言葉を用いた、F・ノエルとE・ラブラスであった。講座としては、アベル・フランソワ・ヴィルマン（一七九〇—一八七〇）がソルボンヌ大学で「フランス文学講義」（一八二八—九）を担当し、中世文学と十八世紀文学を対象として欧州諸国の文学を比較

したことに遡るのが通説だ。この講義を土台にして書かれたのが四巻本の『十八世紀フランス文学概観』と、二巻本の『中世フランス文学概観』である。⁽¹⁾前者に関しては、イギリス文学との関連を扱った箇所だけを読んだが、日本流にいうといわゆる国文学史といってよい。しかし、それだけに止まらず、イギリス文学とフランス文学の両者の間に見られる影響関係が論じられている点では比較文学と呼び得る。さらに、ヴィルマンは一八二九年にソルボンヌ大学で「フランス十八世紀作家の外国文学および欧州の精神に及ぼした影響の研究」と題して講演を行ったと諸家が記録している。これは表題しか見ていないが、四巻本の中に血肉として取り入れられているのであろう。

わが国でも荻生徂徠（一六六六一—一七二八）が明代古文辞派の詩文を学び、その方法論に影響され、『弁道』『弁名』を著わし、古文辞学派を樹立したことがある。徂徠には受容者としての意識が濃厚に出ているが、わが国の比較文学者の間では、比較文学のジャンルでこれを取り扱おうとする動きは見られない。しかし、ヴィルマンの手法と対比し、広義に解釈すると、徂徠にもある程度は比較文学的発想が生まれていたといえなくはない。

ヴィルマンよりややおかれて、ジャン・ジャック・アントワヌ・アンペール（一八〇〇—一八六四）が『中世フランス文学研究序説』⁽²⁾を刊行し、その中で欧州の中世文学の比較を試みたのであった。シャルル・オーガスタン・サントーブーヴ（一八〇四—一八六九）が『続月曜叢談』⁽³⁾（一八六五）の中でアンペールを比較文学の提唱者としたことも記録しておかねばなるまい。

『比較文学』と題した書物の最も早いものは、一八八六年に刊行された。アイランド生まれのハチソン・M・ポスネット⁽⁴⁾（一八五五—一九二七？）の著作である。この本が刊行されて二、三年する

と、わが国では坪内逍遙がこれを入手し、「比照文学」と訳し、明治二十三年（一八九〇）に東京専門学校（現在の早稲田大学）で比較文学の講義をしたのであった。なお、ポスネットの『比較文学』は夏目漱石も一読していた。「英国詩人の天地山川に対する観念」、『哲学雑誌』明治二六、三二六）の中では、文学の定義ないしは範圍を考究するに際して、ポスネットの『比較文学』の第一章を参照したと記しているから、この本は日本でもある程度読まれていたわけである。なお、ポスネットは能の「羽衣」などを取り入れ、日本文学に關してもかなり言及している。その意味では、これまで比較文学の元祖のようにいわれていたフランス派の学者より、はるかに比較文学らしい比較文学を志向していたのである。

大学の講座として比較文学という名称を用いた最も早い例は、アメリカのコーネル大学である。一八七一年に牧師でもあったチャールズ・チャウンシー・シャックフォードが「一般文学すなわち比較文学」と題する講座を開設したのであった。これについて一八八七年にはミシガン大学でチャールズ・M・ゲイレーが「比較文芸批評」をゼミナールの形で担当した。逍遙が比照文学を講義した一八九〇年の秋学期にはハーヴァード大学でアーサー・リッチモンド・マーシュが比較文学の主任教授となり、中世文学を中心として講義を始めたのであった。

ヨーロッパの大学での最も早い「比較文学」の講座はポスネットの『比較文学』刊行の年、一八八六年に一致している。ジュネーヴ大学でエドゥワール・ロッド（一八五七—一九一〇）が比較文学の講座を担当したのであった。ドイツでは講座よりも雑誌が先行し、マックス・コッホ（一八五五—一九三二）が一八八七年に『比較文学史雑誌』を創刊した。フランスでは一八九六年にリヨン大学

で比較文学の講座が創設された。マリウス・フランソワ・ギユイヤール⁽¹⁾（一九二一）が科学的な比較文学研究の最初の書物とまで賞讃した『ジャン・ジャック・ルソーと文学的コスモポリティスムの諸起源』を書いたヨセフ・テクスト⁽²⁾（一八六五—一九〇〇）がこの講座を担当し、比較文学の内容を充実させることになったのである。早逝したテクストに継いで、フェルナン・バルダンスベルジェ⁽³⁾（一八七一—一九五八）が講座を担当し、労作『フランスにおけるゲーテ』『バルザックにおける外国的指向』などを世に問い、比較文学は広くそのアイデンティティを得るようになった。こうした状況をふまえて、現在、日本で比較文学を取り扱った論考をみると、わが国ではバルダンスベルジェ以降の比較文学を比較文学として認め、それ以前の比較文学はどちらかという先史時代として扱う風潮が見られる。

フランスにおけるこの学統は、比較文学的手法を用いて不朽の研究書を残したギユスター・ラソン⁽⁴⁾（一八五七—一九三四）が出現したことによって、他の国には見られない強力なものになった。ラソン⁽⁴⁾の著作『フランス文学史』（一八九四）、編纂『近代フランス文学史書誌提要』（一九〇九—一四）は直接、間接的にフランスの比較文学を確固不動のものにしたのであった。この過程についてはポール・ヴァン・チーゲム⁽⁵⁾（一八七一—一九四八）の『比較文学』（一九三一）に詳述されている。従来、日本で比較文学が論じられる場合、必ずといってよいほどフェルナン・バルダンスベルジェとカポール・アザールの所論が引き合いに出されたり、ポール・ヴァン・チーゲム、ジャン・マリ・カレ⁽⁶⁾、マリウス・フランソワ・ギユイヤールなどの主張が重んじられた背後にはこうした歴史があったのである。この発展過程は既述のヴァン・チーゲムの著作を初めとしてわが国で刊行

された比較文学の研究書に詳しく書き込まれているので、ここでそれを要約する必要はないと思
う。

ところが、第二次大戦後アメリカの比較文学が長足の発展を遂げ、その影響が日本の比較文学研
究にも投影されるようになった。中でも一九四五年に発表されたワーナー・ポール・フリードリッ
クの「比較文学の実情」は当時のアメリカの比較文学白書でもあったためによく読まれた。スイス
生まれでハーヴァード大学で博士号を得たフリードリックはバルダンスベルジェと組んで、ノース
・キャロライナ大学から『比較文学書誌』(一九五〇)を刊行し始めた。フランスの国文学ないしは
国文学史中心の比較文学と異なり、より学際的手法が取り入れられるようになったのである。

また、戦後のアメリカでは、コロンビア大学で比較文学を教えていたアーサー・E・クリステイ
(一九〇〇—四六)の死によって『比較文学通信』(一九四二—四六)は廃刊になったが、一九四九年に
オレゴン大学の『比較文学』、五〇年に既述の『比較文学書誌』、五二年に『比較文学・一般文学年
鑑』がそれぞれ創刊された。これらの諸雑誌が日本の若い比較文学研究者に与えた影響は大きかつ
た。

たまたま第二次大戦の終結一年後にクリステイが病没したため、日本では『比較文学通信』を論
じる比較文学者が殆どいないが、これは比較文学と世界文学との関連を考える上で重要な雑誌であ
ることを特に強調しておきたい。中国に生まれ育ったクリステイは一九四二年、日米戦争開戦直前
に「比較文学委員会」を発足させ、創刊号には大統領ローズベルトに書簡の形ではあったが、「合
衆国内の自由思潮の源泉」を書かせたのであった。クリステイがこの時期に英訳された日本文学の

リストの作成まで企画していたことが、戦後のアメリカにおける日本文学研究の遠因となったことを日本の比較文学者も国文学者も見逃してはならないと思う。日本ではまだアメリカの比較文学の発展を歴史的に研究する機運が生まれていないだけに、今後比較文学の研究に志す者にとっては魅力あるテーマとして提案しておきたい。

フランスの比較文学は日本流にいう国文学研究の一翼をになうものとして発展し、アメリカの比較文学が世界文学研究に貢献するものとして展開したのであった。この二つの潮流が日本に流れ込んだために、日本で比較文学を論じる学者の間に多彩な比較文学観が生まれたのである。そのために、比較文学は学問としての独立性を確立し得ず、かなり長い間文学史の一部門ないしは文学研究の方法論とみなされていた。このような事情を反映しているのが日本の比較文学の現状である。小林路易は「比較文学導入の方法的反省」(『比較文学年誌』第一号)と題する論文の冒頭で、戦後の日本における比較文学の発展を指摘した後に、次のように述べている。

しかしそのうわべのはなやかさにもかかわらず、内部の混乱はしだいに覆うべくもなくなってきた。おそらく現在では、「比較文学」という言葉を口にするひとの数だけの比較文学の概念があるのではないか。

もしも、小林の指摘する通りであるとすれば、これは比較文学のために憂慮すべき状態であるといわねばなるまい。おおよそいかなる学問でも、それが学問として成立するためには法則定律性が与えられなくてはならない。比較文学に抽象的な定義を下すことより、比較文学研究を実践することがまず第一であるという論者もいる。新しい学問の場合、比較文学にせよ、あるいはマーケティング

グにせよ、コンピューター・サイエンスにせよ、抽象的定義を求めることは難しい。そのために、まず実践をすべきであると主張する研究者の心情も理解できないわけではない。しかし、いかなる学問にしてもその本質が明確に規定されない限りは、体系を確立し、さらにその学問の範囲や方法を定めることは不可能であろう。経済学が財の生産に始まり消費に至る過程、及び用役の種々相を対象とすることが明確に規定されていなかったならば、ケインズ理論が優れていたとしても、経済学におけるこの理論の意義は認められなかったであろう。おそらくケインズ理論を純粹に経済政策としてニュー・ディール政策に適用することは不可能であったろう。官僚政治の発達した二十世紀においては、経済学と政治学の重複現象がかなり濃厚になつてゐるため、この理論は政治学の分野に入れられてしまふおそれがなかつたとはいえない。しかし、いかに重複があつても、一つの学問はその意義と目的が明確に規定されている限り、その独立性は失われなはずである。学問の本質なり、究極の目的が確立されていない限り、十人十色の学説が生じることが避け難い。したがって、比較文学の本質を探究し、その法則律性を求めようとするのは当然のことである。先進各国における比較文学をめぐる論議の混乱から脱却し、比較文学の意義と価値を明確にした上でこの学問に対応すべきである。欧米における比較文学者の諸説を引用し、それを下敷にして比較文学の定義をモザイク風に求めようとは思わない。あくまで純粹科学の一分野として比較文学を定義し、その存在価値を明らかにしたいと思ふ。

日本の比較文学の後進性は、フランス派の比較文学、アメリカ派の比較文学などの名辞によって裏付けされているのである。と同時に、これはこの学問の基盤が脆弱であることを暗示している。